

鎌倉帰還

「日蓮法師の一行は本当に五、六人の同勢か、そんな馬鹿なことがあるか」

「牟礼街道からの報告でございますから、間違いはありません。しかも峠の上ではつきりみたと申します。見通しのきく所ですから、人数のかくししようがありません」

「それが本当ならば、こんな大騒ぎは、一寸みぐるしいではないか」

「そうもいくまい、みな自分の宗旨を守るために集まったのだから……」

時は文永十一年の三月二十日、処は長野盆地の一大名利たる善光寺の書院である。真言宗、禅宗、念仏宗の宗徒が書院一杯にあふれていた。

「阿弥陀仏を誹謗する日蓮に、善光寺の門前を通させてなるものか。念仏を唱えれば、地獄におちるなどと、経文にもないことを説く、破仏の僧、日蓮に、どうして生身の弥陀仏を安置する、この善光寺平に足をふみこませて、なるものか」

「そうだそうだ」

二、三十の人々が一斉に声をあげた。

「まった!!」

と喊声かんせいをしずめる一声が、かかった。

「私は鎌倉極楽寺の良観上人とゆかりのある道観房と言うものです。只今どなたかが、この善光寺平だいらの土地を日蓮法師にふませてはならぬと言われた、なる程結構な考えだと思っておりますが、よく考えてみると、明日は三月の二十一日、彼岸の中日です。弥陀の名号をとなえて、弥陀の彼岸きしに達すべき彼岸の中日です。どうです。みなさん、その弥陀の名号を唱えれば地獄に落ちると、叫んで、自分こそ、自分の言葉の通り、佐渡の島で、地獄の生活をしてきた、日蓮法師を、生身の弥陀仏おわします、光明遍照門、定額山善光寺の門前で、地獄ならぬ、極楽に送つてやろうではありませんか」

暫らく、座中から返答がなかった。道観房は坊主頭の汗を手でふきとばすと、にっこり笑つて、後をつづけた。

「昔から佐渡の島にながされて、帰つてきた者は一人もおりません。佐渡の念仏門徒がふがいなかったのです、日蓮が明日ここを通るといふ事態じたいになったのです。佐渡在島中に日蓮を殺しておけばよかったです。だが、まだ遅すぎはしないのです。念仏の悪口を言った、日蓮を「身はここに心は信濃の善光寺」と日本国中の人々が、参詣できぬ人もふかく心に托しておる、この善光寺

の門前で、一つ往生して貰いたいと思うのです。鎌倉の幕府の方は私が引きうけます。どうです。善光寺平に引きよせて、しかも善光寺の門前で命を貰う、正々堂々とやるうではありませんか」

拍手が書院一杯になった。

「何故、念、禅、真言の宗徒が、斯くも大勢あつまったか、それは、生身の弥陀みだの門前を破仏の僧が通れる筈がない、その証拠をみるためにあつまりましたと申せば、同勢僅か七人に対し、二、三百人あつまったも決して不思議ではない、またおかしくもない、言いひらきがしやすいと申すものだ、どうだ、道観の善光寺平、日蓮ひきこみ戦術は……」

「うまい、うまい」

「賛成、賛成」

書院一杯に声が、うずまいた。

書院の庭の松は、白い砂に自慢の姿をうつして、この坊主共の騒ぎの外にあつた。

「長野市にある善光寺は信濃の善光寺にあらずして日本の善光寺である」と照会書に書きだすくらいだから有名なことは勿論である。本尊阿弥陀如来については、善光寺縁起には昔、印度ビシヤリ国の月蓋長者が、悪病流行の時、釈尊の命をうけて阿弥陀如来を祈って悪病がやんだので閻えん浮提金ぶだいじん（金の中で最高の金）で阿弥陀仏の像をつくった。其後一千余年後、この像は支那に伝わ

り、更に三百年後に百済に伝わり、その国にあること百余年にして欽明天皇十三年冬十月、百済王聖明、經卷仏具と共に我国に貢献したのが、如上の像で、我国仏法渡來の初の靈像であるとする。この後仔細あつて信濃の入善光が、この阿弥陀仏の像を難波の国から負つて帰り、信濃水内郡芋井の里にまつたのが、今の善光寺の起りである。併し歴史家は欽明天皇の朝、我国に伝えられたのは釈迦像であつて、弥陀像ではない。今の善光寺の本尊は、欽明帝の時ではなく、後に敏達天皇の時に、百済の仏工がつくつたものであるとする。但し、善光寺では「日本紀に釈迦なりといへり、これ恐らく世の人の暗記せし誤なるべし」という。又善光なる人の存在についても否定の説もある。治承三年一一七九年に善光寺がはじめて焼失したので源の頼朝が信濃の一国に命じて再興させ、建久二年に落成して以来、北条氏代々の保護があつたので、善光寺は鎌倉時代が最も隆盛であつた。だから聖人を要撃しようという各宗の僧侶があつたのも無理がない。善光寺は、元來善光の子孫が之に奉仕して十一代に及び敢て僧侶をもたなかつた。故に中頃迄は、一宗一派に属しなかつたので、皇室を始め庶民に至る迄も信仰した。現在では、一ツの寺が、天台宗と浄土宗とに属し、宗教法人法からみても不思議な存在になつてゐる。

一 一の谷の大聖人は既述の通り、開觀兩抄を始め、諸法実相抄、如説修行抄、顕仏未來記、当体

義抄、法華行者値難事、授職濯頂国伝抄、等々の著述をなされておるが、決してこれらの著述を平穩のうちになされておったのではなく、劍の林の中での著述であつた。

大聖人が一谷入道の阿弥陀堂の廊下にて、命をたびたび助けられたり（千日尼抄）とあるのをみてもわかることである。大聖人の身辺には常に刺客が徘徊していたことがわかる。一の谷に移つてからの方が、大聖人に対する庄迫は益々きびしくなっていた。それは塚原問答後、念仏の数珠をきる者がふえて、佐渡一国が、大聖人に帰依する状態となつたので、念禅真言の僧侶が騒ぎたてたのである。

日蓮房が佐渡にいたのでは、念禅真言律の寺は一軒もなくなつてしまふ。それを大聖人は種々御振舞御書にかかれておるから拝読してみよう。

「念仏者集まりて僉議す。かうてあらんには我等かつえ、死ぬべ。いかにもして此の法師（大聖人をさす）を失わばや、既に国のもも大体つきぬ（大聖人に帰依したことをさす）いかんがせん。念仏者の長者の唯阿弥陀仏、持斉の長者の性論房、良観が弟子の道観等、鎌倉に走り登りて武蔵守殿に申す。此の御房（大聖人の意）島に候ものならば堂塔一字も候べからず、僧一人も候まじ」（全集九二〇ページ）とある。

我等かつえ死ぬべし、念仏等の僧侶も一人もなくなつてしまふ、寺もなくなつてしまふぞ、折伏された念禅真言の僧侶の心中は、昔も今も人情には変りがないことが、大聖人さまの手で書か

れている。

かくて、道観等は工作こうさくして偽の御教書を手にいれると、大聖人御住所の前を通ったという理由だけで、法華宗の人を牢にいれたり、また大聖人さまに食料を御供養しただけで、謀叛にかたんしたとこじつけて国を追ったり、家屋敷をとりあげたり、ひどいのは妻子が牢にいられると言う事態迄ひき起して、大聖人を圧迫したのであった。

だが、大聖人さまもこれを黙してみておったのではなかった。

河野辺殿等中

大和阿闍梨御坊御中

一切弟子等中

三郎左衛門尉殿

謹上

日蓮

富木殿

という従来にない形で御手紙をかいて富木殿にあたえた。

「追つて申す、竜樹、天親は共に千部の論師なり、但権大乘をのべて法華経をば心に存して口に吐きたまわず、此に口伝くでんあり、天台伝教は之れをのべて、本門の本尊と四菩薩と戒壇と南無妙法蓮華経の五字と之を残したまう……（略）各々我が弟子たらん者は深く、此の由を存ぜよ、設

い、身命に及ぶとも退転することなかれ。富木、三郎左衛門の尉、河野辺、大和阿闍梨、殿原、御房たち、各々互いに読みきけまいらせさせ給え」

と強い御指南があつて、最後に、

「文永十一年四月十四日

日蓮花押

一切の諸人これを見聞し、志あらん人々は互しに之を語れ」（全集九六五ページ）と書かれておる。

偽の御教書まで出して、良観達一派が、大聖人が悪行をたくらんでおると、佐渡で言いふらしておるから、法華宗徒はこの手紙をみたならば、大いに奮起して、互いにこれを語れとは、鎌倉中に評判して、幕府にも達するようにせよとの意味である。鎌倉では、この手紙をみて、大聖人の弟子を始め、門下一同が、大聖人さまの赦面運動に狂奔したことが察せられる。

さて、人法の開頭を佐渡でなされた、大聖人さまに、最早佐渡には用がなくなつて帰るべき時期がきていたのである。また、鎌倉の門徒だもの運動も効をそうした。

「いよいよ強盛に天に申せしかば、頭の白き鳥とびきたりぬ。彼の燕の丹太子の鳥の例、日蔵上人（註一）の山がらす、かしらもしろく、なりにけり、我がかへるべき時やきぬらん、とながめしこれなりと申しもあえず、文永十一年二月十四日の御赦免状、同三月八日に佐渡の国につきぬ。同十三日に国を立ちて網羅もうらという津にをりて、十四日はかのつにとどまり、同十五日に越後

の寺泊のつに、つくべきが大風にはなたれ、幸に二日程をすぎて柏崎につきて、次の日は国府につく」（全集九二七ページ）

と大聖人は光旦房御書に自ら書かれておる。

「そこを通られる法師をば、日蓮法師とみたが、あやまりはあるまい」

大聖人の一行が、善光寺の門前をよこぎろうとした時である。

侍が二、三人の家来をつれて、大聖人のゆくてをはばんだのである。

「いかにも、私は日蓮であるが……」大聖人は足をとめて、侍をみつめた。

門前といつても、善光寺の山門ははるかかなたにあつて、山門がこの街道をのぞんでおるといった方がよい距離である。善光寺の坂下といった方がよい場所である。今大聖人のたつておられる街道は、牟礼から豊野、吉田を経て善光寺を右にみて川中島に至る街道であつた。

「法師、あの門が目につかぬか、ここを何処と心得て通られるか」

「僧道をゆくものが、そのような御質問に、真面目で答えてたまるものではない、それ一同、こんな侍に構ってはおられぬ、行け、行け」

大聖人が叱咤されて、歩を運ほうとされた時である。

わあっという喊声が、坂の上にあがった。念仏禪真言の宗徒二、三百人が、手に手に武器をもつての喊声であった。

それは今にも、坂をかけおりて、大聖人にせまろうとしたのである。

侍はその勢を両手をひろげて、制止すると、大聖人に言ったのである。

「御房もみられる通りの勢いである、逃がれる道はないと思うが、どうじゃ」

「そうは思わぬぞ。何故のふるまいか知らぬが、誰か、話のわかるものを一人出して下さらぬか」

「日蓮法師が、末期に一言ひとこといいたいと申しておる、ききとどけてやるか、どうじゃ」

坂の上に向つて、侍が声をかけた。

「おう、ききとどけてやろう、儂わしがそこ迄ゆくから、殺さずにおけよ」

それは道観房の声であった。

道観房は勝ち誇った態度で、坂を一人悠々とおりてきた。

大聖人の前にたつた道観房は、じろりと一行七人の顔を、なめまわすようにして、ながめ終ると、

「いかに、日蓮、汝は、理由もなく、かかる乱暴に逢うと思うと、よい往生もしかねようから、みせてやるものがある、しかと拝めよ」

と言つて、道観房が、大聖人の前にさし出したものがあつた。それは次の如く書いてあつた。

「佐渡国ノ流人ノ僧日蓮、弟子等を引率シ悪行ヲ巧ムノ由ソノ聞エアリ、所行ノ企甚ダ奇怪也、今ヨリ以後、彼ノ僧ニ相隨ハンノ輩ニ於テハ、炳誠ヲ加ヘシム可シ、尚ホ以テ違犯セシメバ、キヨウミョウ交名（註）ニヲ注進セラルベキノ由候フ所也。仍テ執達件ノ如シ

文永十年十二月七日

沙門觀患上

依智六郎左衛門尉殿

「どうだ、この御教書をなんとみるか」

道観は、大聖人の両眼をみたが、大聖人がぐつとにらむと、二、三步後ずさりをしたが、口だけはまだ達者であつた。

大聖人は背後うしろをふりむくと、

「日興此の者に、こちらにも拝ませてやるものがあるう、しかとみせてやれ」

声に応じて、日興は懐中からとり出すと、黙然として、道観房の眼前に、両手をもつてひろげた一通の状文、それは次の如くあつた。

「日蓮法師御勘氣ノ事免許セラレ候也

文永十一年二月十四日

藤左衛門入道殿

行兼 在判
消長 在判
行平 在判
光綱 在判

「どうだ、この状をなんとみる」

「そんなものは偽せもんだ」

と道観房が叫んだ。

大聖人はその声をきくと思わず失笑せられた。道観房は冷汗をかきながら、

「なぜ笑う、なぜ笑う」

とみえをはりながら叫んだ。

「この状文を国府に示して、この街道まできた日蓮である。そしてその方がもつ状文の沙門観恵とは、武蔵守宣時の家人（秘書役の）入道であることも当方は承知だ。それは宣時が、こしらえた真赤な偽物だからである」

「そんなことはない。だいそれたことを申す坊主だ」

「貴様も坊主ではないか……」

大聖人が答えたので、大聖人の一行の中から嘲い声わらがどつと起つた。
道観房は、

「もはや問答無用じゃ、日蓮坊主、生身の弥陀の門前で、見事な往生をとげたがよい」

それつと、坂の上の同勢に合図の手をあげた。大聖人の一行中、日興と日頂は思わず、笈を肩からおろすと、その中に手をいれた。

「兩人ともなにをする。あの人数に手向えば火に油をそそぐようなものである。静かにせられい」

大聖人の御言葉であった。笈の中には、刀がひそまれていた。その刀は今年の正月に北条弥源太（註三）より佐渡の国にあった、大聖人に贈られた太刀が、一振りづつかくされてあったのである。

わあつと喊声をあげて、念仏、真言禪の宗徒たちが、阿弥陀仏の仇を殺してしまえと、殺気だつて、坂をおりようとした。

この時、街道の前方から侍をのせた一頭の馬が蹄の音たかく飛んできた。

「どけどけ、当国の領主、村田大隅守、手勢三百人を率いて、只今、到着……」

その声が終るか終らないかの中に、四、五頭の馬にのつた侍達が、またまた到着した。

「日蓮法師に、手を出すものは、我等、村田大隅守の家人が引受けた、さあ、かかつてこい……」

坂の途中までおりてこようとしたり、念禪真言等の善光寺にたてこもった宗徒に向つて、勢もよく大隅守の家人達は、馬をのりいれたのである。忽ち前にもました喊声が、善光寺の門前に上つたが、それは不甲斐なくも善光寺の門をめがけて逃げてゆく、念禪真言の宗徒勢の情けない声であつた。

大聖人は、何事もなかつた如く次のように書かれておる。

「最後の国府、信濃の善光寺の念仏者、持斎真言等は雲集して僉議す。島の法師原は、今までいけてかへすは人かつたい也。我等はいかにも生身の阿弥陀仏の御前をば通すまじと僉議せしかども、又越後のこようより兵者どもあまた日蓮にそいて、善光寺をとをりしかば力及ばず、三月十三日に島をたちて、同二十六日に鎌倉に打ち入りぬ」(全集九二〇ページ)

(註一) 「後拾遺和歌集」に歌はあり。但しこれは増基法師なり「御正本ニハ仮名ヲ以テゾウ上人ナド之レアルガ、後人私ニ日藏トカケルカ」本化聖典下二五七八ページ。

(註二) 上進書に数多の人の名を記した書付

(註三) 北条氏の一族であつて、北条時宗大叔父と言われる。大聖人に文永十一年正月、刀二口を贈る。その返事が弥源太殿御返事

